

Journal des dames et des modes, 1912-1914. Paris, Aux bureaux du journal des dame.
79vols. 22.5×14.0 cm <383.135-J>

Hiler p. 486 Colas 1567

1912年6月1日に創刊され、1914年8月1日、第一次世界大戦の開始とともに終る。日本流にいえば大正元年から3年までの丸2年間だけの刊行で、毎月3回、1250部はオランダ紙に、そして29部だけはデラックス版としてジャポン紙（局紙）に銅版印刷され、ポショワールの彩色が施された限定版である。こうして合計79分冊からなるこの雑誌には184枚のモード版画が収められ、アナトール・フランスほか多くの詩人らが執筆した。イラストレーターには有名なL.バクスト（Léon Bakst 1866—1924）、G.バルビエ（Georges Barbier 1882—1932）、C.マルタン（Charles Martin 1848—1934）、P.イリーブ（Paul Iribe 1883—1929）、B. B.ド・モンヴェル（Bernard Boutet de Monvel 1881—1949）らがいて本誌の評価を高からしめている。

もともと、この誌名は、フランス革命によって罷免となった修道院長のピエール・ド・ラ・メザンジュール（Pierre de La Mesangère）がクレマン夫人とともに1797年から1839年まで刊行した同名のモード誌（99）を、その形式とともに踏襲したものであることは、本誌の第1分冊の冒頭に1812年、ラ・メザンジュール刊の扉と図版が複製で掲げられていることによっても知られる。この意味でも、本誌はモードにおけるフランス革命後の新しい復興精神の、20世紀における復活を企図したものであったとみられる。

では、1910年代に入って、なぜこうした優れた一連のユニークなモード誌が登場するようになったのか。ヴェロネージ女史は、このことについて名著『アール・デコ』の中でのルパープ（Georges Lepape 1887—1971）からの引用をこう述べている。「1909年は転換の年であった。この一年の間にあの“ベル・エポック”はわれわれの“偉大な時代”となったのだ」と。1909年はまたディアギレフ（Sergey Diaghilev 1872—1929）の率いるロシア・バレエ団がパリで初公演を行った年であり、その後このロシア・バレエは20年間西欧文化の焦点の一つになったのだった。

同じ主旨の見解はハンセン女史にもみられる。すなわち「19世紀スタイルの混合に対する本格的な反発は第一次世界大戦直前に始まった。……建築家や家具のデザイナーは無駄な装飾や手工芸を模倣することをやめ、基礎の形体に力を入れるようになる。……女性の服装もこの新しい理念の下に変化する。今日の一般に着られている服装が第一次世界大戦に由来するのか、あるいは大戦中に由来するのかをはっきりさせるのはむずかしいが、その後に来るものをほめかしたにすぎないにしても過去の服装とはっきり縁を切ったのは事実である。」と。（近藤・原口共訳）（58）。一大変革期の到来なのであった。（石山）